

1993年5月15日発行 1975年2月28日第3種郵便物認可
毎月1回15日発行
定価／150円
年間購読料／2,000円
(送料共)

編集／緑の地球ネットワーク
Green Earth Network

大阪市港区市岡元町3丁目9-16 西建ビル
TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739 (番552)
郵便振替 大阪4-128465
COM21 通巻310号 発行/COM企画室

緑の地球 GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

- 黄土高原緑化協力の旅を終えて……P 2, 4~6
- ネパール緑化考察団出発を前に……P 3



大同県徐町郷のこどもたち

1993・5

16

息の長い協力を！

93年黄土高原緑化協力団団長 清田祐一郎

10年前の体験がなければ、また事前に黄土高原の写真を何枚も見ていないなら、ほとんど木もない黄土高原の光景に、私ははるかに大きなショックを受け、絶望的な気持ちになっていたらうと思います。

10年前に重慶から貴陽まで列車で旅をした折に車窓から見たその地域の山には、ほとんど木が生えていませんでした。内実はともかく「山は緑だ」という日本の常識が、中国では全く通用しません。あの地方の山はガイコツのようで、雨が降っても石灰質の岩がまるで吸い落とすだろことは、車窓から見ても分かるほどでした。

旅立つ前に見た黄土高原の姿もまた貴州とは違った意味ですさまじいものでした。果てしなく続く黄土、土砂流出による無数の亀裂、遠くの山には緑のカゲすらありません。

大同からマイクロバスで渾源に向かったのですが、道路の両脇には2~3年前に植えられたものでしょうか、ボプラがややたよりなげに、しかししっかりと根づいていました。いたるところに「緑の銀行」をはじめ、さまざま

なスローガンが掲げられ、植樹運動に対する意気込みを示しています。「これら、なんとかやれそうだな」というのが

最初の日の印象でした。頭の中にこびりついていた「黄土高原は難しい」という遠山先生の言葉が、スッと消えていくような気がしました。

しかし、一週間以上にわたって雁北地区を走り回っているうちに、妙な不安が心の中に小さな渦をつくり始めました。道路の両側には全てボプラが、あるものは7~8年も経つのか、しっかりととした樹に育っており、あるものはやっと活着し、頼りなげに風に揺れていました。成長の遅い松は、山肌のあちこちに、今にも黄土に覆い尽くされそうな様子で、心細げに点々と植わっています。

ふと、中国だけではなく日本でも歐米でも、政府の号令と後押して行われた農業政策で、スムーズにいった例があるだろうか、という不安が頭をかすめました。ボプラが何かの病虫害にと

協同の植林に汗を流す（左端が筆者）



りつかれたらどうなるのだろう。私は結局「何とかやれる」という気持ちと片隅にこびりついた「不安」の両方をかかえて帰ってきました。

しかし、そう恐れる必要はないかもしません。4千年にわたって「人間の文明」が疲弊させ尽くした大地に、人間の一世代をサイクルにする木を植えようというのですから。

「スムーズにいけば大幸運、5年後に幾多の失敗を経て再出発できたらそれでよし！」ぐらいの気持ちで、この運動は取り組んだ方がよさそうです。

これは提案ですが、これから起こるであろう成功と失敗の全てをきちんと蓄積するために、一生を黄土高原にかけられるような林学研究者を組織し、中国の研究所や大学などと結びつけて、共同の研究組織をつくる作業をやってみてはどうでしょうか。

夏の黄土高原へ——ワーキングツアーのお誘い

7月29日出発・各地で植樹協力・個人旅行の追加もOK

緑の地球ネットワーク(GEN)の黄土高原における緑化協力も2年めにはいり、相互の理解と信頼も深まってきた。夏のワーキングツアーは船をつかって格安ですので、若い人たちも積極的にご参加ください。

▼スケジュール

- 7.29 神戸発・燕京 345便で天津へ
- 8. 1~7 山西省雁北地区で活動
- 8.11 天津から神戸着・燕京 348便
- △個人旅行をつづけたい人のために
- 8.18 神戸着・燕京 350便も確保しております。

▼活動

山西省雁北地区の渾源県・懷仁県・大同県の黄土大地で植林や苗圃のしごとにみっちり汗を流します。日本の私たちには想像を絶する光景、地元の人たちとひざつきあわせた交流も魅力的です。恒山(懸空寺)、雲崗の石窟、万里の長城(宏賜堡・觀光化されていない素朴な姿)などの観光もおこないます。京都精華大学の植田劭さんも8月7日まで同行される予定ですので、道中の交流もご期待ください。

▼定員

20名(定員に達しだいに締め切りますのでお早めに)。

▼費用

15万円(交通費・宿泊費・食費・ビザ手数料などを含みますが、往復の船中の昼・夕食は自弁。8月9日以降個人旅行をつづけられるばあいの滞在費は各自の負担です)。

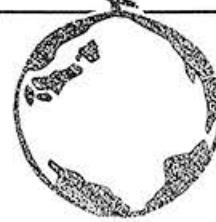
▼受入れ団体

中国共青団雁北地区委員会

▼申込みは申込金3万円を添えてGENの事務所まで。

ネパール緑化考察の旅

5月26日から雨期の2か月間



アジア自然塾と緑の地球ネットワークが共同で派遣するネパール緑化考察団は5月26日、ほぼ2か月の予定で出発します。出発をまえにした若い団員の抱負をアシード関西の機関紙から転載させていただきました。

地に足つけて自分の生き方を学びたい

高力憲子（アシード関西）

5月26日から2か月間、ネパール・ムスタンへ行きます。先日NHKのやらせで噂になった地域です。目的は植樹と、植えた木がしっかりと地域に根をおろすための調査です。

ちょっとさかのぼって私の心の動きに従って、今回の抱負を述べたいと思います。ネパールに行くのは、これで2度目です。私が環境問題に関心をもったきっかけは、発展途上国といわれる国々で飢えや災害に苦しむ人びとに對する同情心と、人びとをそういった状態へ追い込むものへの怒りでした。

だから私は、彼らの悲しみ、苦しみを少しでも減らすための“援助”をしたいと思っていました。本当に微力だけれど、一人でも多くの人の力になりたい、そして喜びを分かち合いたい。しかし、何をしたらいいのだろう？

それが私の素直な気持ちでした。昨年の暮れ、ネパールを初めて訪れました。私は理屈では納得できないタイプの人間なので、この眼で見、体で感じて、その答えを得たいと思ったからでした。

そこで私が見たものは、次のことでした。援助という名目で、たんと金を注ぎ込まれた大規模プロジェクトの惨憺たる姿。不合理な国際経済によって産み出される悪影響の巨大なこと。それによって起こる環境破壊。ネパール国内での南北問題。そして、それは人びとの心にまで深く影を落としているのでした。しかし、貧しくとも一日一日を穏やかに過ごす農村の人びとの暮らしは、非常に豊かで、たくましく感じられました。

そうして見てきた中で、私の目は日

本の方へ、自分の生活してきた土地へと向くのでした。社会的要素は違っても環境問題の構造はいっしょに思えたからです。それまで日本の中にいて見えなかったことが、ネパールという国を通してあぶりだしされたかのように明確化してきました。

結局、私がネパールの人びとにすべき援助などなく、同じ人間としての協

ムスタンへの道／カリ・ガンダキ川と村々



力であるように思いました。そして駆け足でネパールという国を見てただけに、もっと地に足をつけて、もっとじっくりとあの地に触れ、自分の生き方を彼らに学びたいという気持ちにかられました。

だから、5月26日、ネパールに行きたいと思います。人員も、金銭的にも小規模です。メンバーは10人。目的地「ムスタン」まで往復35日間を歩き続

けます。リーダーは、今まで、そしてこれから的人生をこの仕事に捧げようとしている人です。だからこそ今回の参加を決めました。気をつけて、いろんなことを歩きながら考えたいと思います。

ない。

日本は、開発援助だといって多くのお金をネパールを含めたアジアの国の開発計画へ投資している。しかし、その多くはダムや道路といった、そこで生活している人びとに直接役に立つものではなく、日本企業とか政府のお偉方といった一部の人たちの利益にしかならないとよくいわれる。

これは、援助する側とされる側の人間の間の心のギャップが大きいことが原因の一端なのではなかろうか。人の生活を援助するということは、軽々しくやっちゃいけないことなのだろう。

なにしろ僕は知らないことが多い。本とかTVとかでなく、直接体験することが少ない。生まれてこのかた、徹底的に自然の中で過ごしたこともない。今度の2か月間は、自分の自然観とか人生観に大きな変化をもたらすだろうと思う。

自然観、人生観に変化もたらす旅に

喜多亮夫（アシード関西）

5月末からネパールへ行く。「緑の地球ネットワーク」と「アジア自然塾」との合同企画・ムスタン緑化計画の前調査に同行させてもらうことになった。

環境問題が取り沙汰され、地球の未来が危ぶまれている。が、普段の生活から、そんなことを実感するのは難しい。交通網・情報網が高度に発達し、夜遅くまで電気の光が絶えない都市生活。スーパーに行けば食物が並んでいて、自分で自分の食事すら作らなくても生きてゆける生活。そんな生活を送る一方で、ギリギリの生活環境の中で自給自足して生活している人たちに、「援助してやろう」など、うまくいくハズがない。かえって迷惑になりかね

厳しかった黄土高原の自然環境

黄土高原緑化協力団は山西省雁北地区の4か所で合計5~6百本の植樹をして帰国しました。団員の感想をつづっていただきました。

想像を絶する環境

川上四郎

(元農協営農指導員)

黄土高原の視察に参加するにあたり、事前の勉強につとめましたが、黄砂と乾燥、大気汚染など、想像以上に厳しい黄土高原の環境に驚きました。

植樹事業は中国の政策であり、国民の意識も高揚し、悪環境のもとでも計画的な植樹がすすめられている。この努力が成功するよう期待するが、水不足で枯れ死する苗も多く、その解決が先決だと私は思う。

黄土の丘陵地は、天に昇るまで農地として耕され、水不足と土壤の乾燥で生産環境が特に低下している。農作物はトウモロコシ、アワ、キビ、緑豆が主で、乾燥地で栽培し収穫する。茎葉は家畜の飼料や燃料に使用し、有機質として農地に還元されないため、土壤がやせている。塩基の堆積もかなり深刻で、収穫の向上は望めず、このままでは徐々に砂漠化してしまうだろう。



素朴な姿の万里の長城（宏賜堡）

トウモロコシ、アワなどの茎葉を農地に還元して保水性を向上させ、土を保全する必要があると思う。また流出の激しい地域では積極的に植林を実施するとともに、長期的、計画的に砂防堰堤やため池を建設し、保水力をつくる



恒山での植林活動のあとで

工夫も必要だと思う。そうすれば生産環境も改善され、植樹や農業生産のための水を確保でき、経済効果も期待できると思う。

黄土高原を訪ねて

草 陽一

(新聞記者)

初めて見る中国大陸はやはり、広大だった。とは言っても、わたしたちは中国の一地域の、そのまた一部である黄土高原の一角を駆け足で通り抜けただけだ。

それにもかかわらず、広大という字句で第一印象を表しきれないほどに広い大地が続き、そこに人々の営みがあった。1本の草木すら見当たらない乾いた黄土で、牛馬やロバを使いながら黙々と農作業に励む農民たち。幹線の沿道や集落にポプラや柳を植え、果樹園の植樹に取り組んでいるのも主に彼らだ。

いま、中国が国、県、村を挙げて緑化に力を入れていることを、現地で初めて知った。沿道の至るところ出ている緑化推進のスローガンにもその意気込みが伝わり、圧倒された。現地に到

着した翌日、渾源県の温增玉林業局長が「緑化は農業のため」と語った一言は忘れられない。緑化への思いが凝縮されていると思った。

わたしは今度の黄土高原緑化協力団の一員に加わるに当たって、「はげ山に木を植え、単に緑を増やすこと」と、漠然と考えていた。しかし、年間降雨量約400ミリの少雨地帯で生活し、夏の流水土で大地をえぐり取られてしまう人口の8割を占める農民たちにとって、緑の復活は自らの暮らしを守り、向上させるための切実な願いなのだった。

緑の地球ネットワークに期待し、日本の協力を求める各地指導者の発言が相次いだ。灌漑技術を含む多様な援助で絆を強めよう。

思い出ふかい旅

森井常雄

(元保険会社員)

「緑の地球」「自然の歴史の息吹く中国」の好きな私は、子息に同行を誘われ、漠然と参加したのですが、このたびの現地の体験を三十一文字にまとめてみました。

新緑に 霧雨けむる 野辺のみち
自然の息吹き 心やわらぐ
草木を つれ添うように 蝶が舞う
生ける営み 美しきかな
国々の 歴史はあれど 空の下

未来に向かい 世界は一つ
 (日常で詠むうちの三首)
 やっときた 思いを込めて 西域の
 歴史の重み 忘我の大地
 陽炎に たゆたう人の 地平線
 緑ありしき 面影もなし
 (前年の旅にて詠む)
 友好的 旅路に向かう 悅びを
 いかにつたうか おもんばかりし
 ふたたびの訪ねきたりし 大地おば
 見るも聞くも またあらたなり
 生命の 悅びわかつ 旅の空
 ふれあう人の 心かようを
 願い込め 黄土に植える 樹木の苗
 根強く耐えよ 芽ぶく日ぞくる
 (このたびの歌首)
 清田団長はじめ団員の方や現地の人々ともひざつきあわせた触れ合いができ、樟子松や仁用杏の苗を植樹したことなど、よい思い出の旅となりました。観光旅行では決して味わうことのできない楽しい体験でした。孫と一緒にもう一度行ってみたい気持ちです。

中国の環境問題

橋爪新太
 (化学会社研究員)

渾源県のホテルについてバスを降りると、とたんに鼻につくばい煙の臭い。厨房の煙突から黒煙があがっている。思えば、30年ほど前に、地方から出て職についた大阪の化学工場は漏れた亜硫酸ガスや薬品の臭いが周辺を覆っていたもので、懐かしい(?)臭いでもあった。

出発前に朝日新聞の報道で家庭燃料の「メイバ(練炭)」が大気汚染の原因と知り、日本から練炭と豆炭を持参した。これらは今ではありませんが、もともと明治初期に日本で考案され、海軍で、航行中に煙を吐く、それゆえに敵艦に発見されやすい石炭にかわって軍艦の燃料に用いられたもので、廃ガス対策が施されている。随行の幹部に何度も話したが、「石炭が豊富で安いので、高価な燃料は使わない。大気汚染対策よりもまず食うことが先決なのです」と相手にされなかつた。石像の遺跡や故宮の大理石の彫刻を気をつけて観察したが、酸性雨の影

93年春の緑化協力——3つの事業に

93年黄土高原緑化協力団は山西省雁北地区の渾源県・靈丘県・大同県の合計4か所で植林活動に参加し、一帯の考察をおこなうとともに、以下の3つの事業にたいして、資金協力をおこないました。

1. 渾源県西留郷の「長征苗圃」

92年春から50ムー(3.3ha)の苗圃が建設され、うち15ムー(1ha)にアンズ(仁用杏)が播種されています。1万元(1元=22円)の資金協力によってすぐにも追加して全体に播種することが可能でしたので、そのようにしました。全体で約50万本の育苗がおこなわれ、92年春にできた「日中友好交流青年友誼林」に植えるほか、県下の各地のアンズ林に安価で良質な苗を供給することができるようになります。これによって私たちの協力もより地元に密着したものとなります。

2. 懐仁県新家園郷の「中日青年友好苗圃」

とりえず20ムー(1.3ha)でスタートし、アンズ(仁用杏)を主体にリンゴ、ナシ、ブドウ、ショウジマツ、コノテガシワなどの育苗を開始します。5月の段階で2万元の協力をおこないました。この苗圃が成功すれば、桑干河青年森林プロジェクトの推進力として大きな効果をあげることが期待できます。

3. 大同県徐町郷の「中日青年友好林」

昨年秋に300ムー(20ha)の整地がされており、93年3月からショウジマツの植えつけがはじまっています。苗木代の一部として2万元の協力をしました。ここは水土流失の激しいところですが、マツがしっかりと根づけばその防止と生活環境の改善に役立ちます。

(高見)



活気にみちた渾源県城の町かど

響はいまのところは目につくほどではなかった。健康被害まで伝えられる大気汚染は中国南部のことらしい。練炭と豆炭は、帰途、北京のホテルにそっと置き去りにした次第。

バスの窓の外に延々と続く小老樹(水不足で成長できないポプラ)の林。これほど多くよくも植えたものだと感心するとともに、育てて換金する事をあてこんだにしては徒労に終わった落胆を思った。最近再び、経済をうたい文句に精力的に植林されだしたポプラや果樹の幼樹林を眺めながら、病害虫や環境汚染のために順調には育た

ないかも知れない不安にかられた。緑化にずいぶん努力しているが余りにも荒涼とした国土は広い。失敗を経ながら、百年、2百年の努力が必要でしょう。きびしい自然環境と、まだまだ貧しい暮らしの中国で、緑

化を語ることがどれほどのものか、日本で考えたり報道に接したりでは思いもよらなかつた現実を知るよい機会でした。

いつか緑の高原に

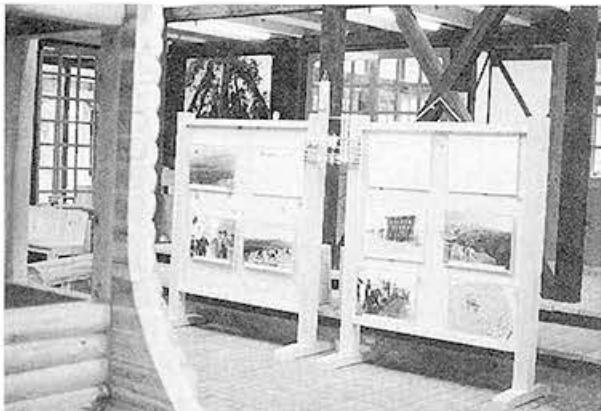
森井正人
 (保険会社員)

黄土高原緑化協力団に参加させていただき、日中の関係者の方々に心よりお礼申し上げます。

参加の動機は、地球環境問題への興
 【6ページ右肩につづく】

河内長野「木根館」でパネル展 ゴールデンウィーク、たくさん的人が

5月1日から9日まで、河内長野森林組合のご協力で、「黄土高原に緑を！」の写真パネル展を開きました。花の文化園のとなりにある市立林業センターの「木根館（きんこんかん）」は木のかおりのただようすばらしいところです。一般市民が木工細工に挑戦したり木や林業とふれあったりする場所です。ロビーにある木できたりっぱな掲示板を4枚おかりし、中国黄土高原の緑化協力のパネルを掲示して来館者にみてもらいました。ゴールデンウィークで花の文化



園がたいへんにぎわい、「木根館」にもたくさん的人が来ました。間伐材をくりぬいて作った募金箱もいっぱいになりました。来館者の皆さん、そして河内長野森林組合の皆さん、どうもありがとうございました。

数多くの苗木にかわります！

黄土高原の絵はがきを！

この「絵はがき」の販売収益は黄土高原森林再生の苗木代として現地に届けられます。1セット(300円)によつて—

カラマツ苗木 100本
ショウジマツ苗木 40本
アンズ苗木 7~10本
ポプラの大苗 2~4本

になります。

昨年秋の発売以来、各方面のみなさんのご協力で2000セット余りを販売し、かなりの協力資金をつくりだすことができました。できるだけ早く残部を売りつくし、みんなのお心を現地に届けるとともに新しい企画をスタートさせたいと思いますので、もうひとふんぱりのご協力をお願ひいたします。

▼1セット6枚組 @ 300円

▼10セット以上は @ 250円

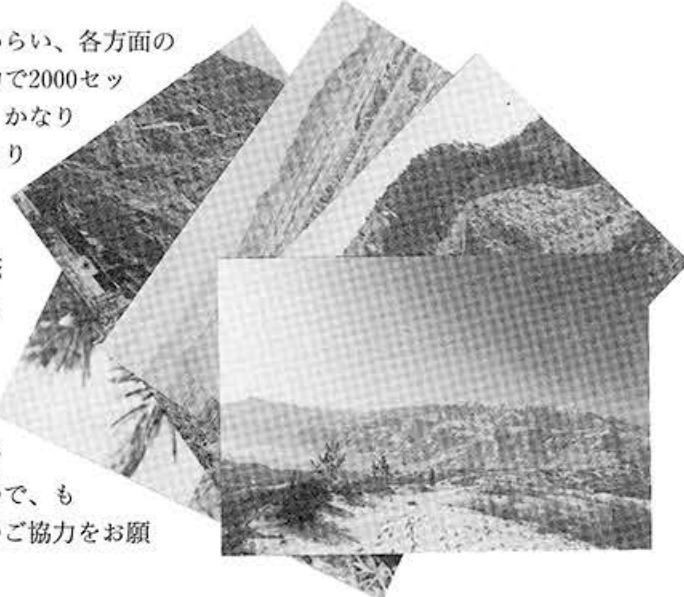
送料は—

1組 72円 2-3組 175円

4-8組 250円 9-17組 360円

18-70組 410~ 670円（地方別）

71組以上のご注文は送料をこちらで負担いたします。



【5ページからつづく】

味というより、自己の日常生活の問い合わせし、気分転換で参加させていただき、心苦しい限りでした。一緒に同行した私の父ともども、反省の念を感じざるを得ませんでした。黄土高原の自然を目のあたりにして、私の自然への認識の甘さ、狭さをこれほど強く感じたことはありません。しかしながら中国の人々の厳しい自然との闘い、付き合い方には驚くほどの逞しさと強かさを感じ、現在の日本の豊かな恵まれた自然を当たり前に取り入れている私は大きなショックでした。

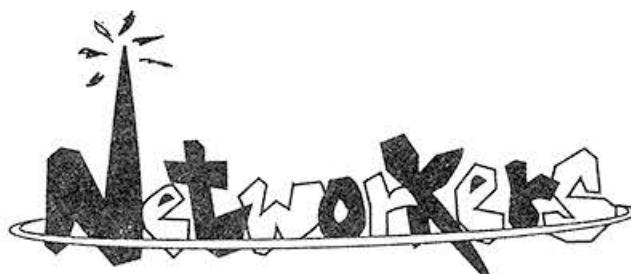
農林業には門外漢であり、中国の人々にはどんな技術的・肉体的協力もできない私ではありますが、私の目でみたこの現実を、日本の人々に伝え、私たちの自然環境への取り組みの反省と将来への展望に、少しでも役立てればと考えています。とくに、日本の若者（私の愚息17歳を含め）にぜひ現地に行ってもらいたいと心から思います。

日中の農林業の専門家、農民の方々には多くの解決せねばならぬ問題をかかえ、長期にわたり大変なことだろうと思いますが、失敗を重ねても、最後には黄土高原が素晴らしい緑の高原に近づければと思っております。そして中国の人々は、自力更生で必ず成功することだろうと確信しています。

竹筒の募金箱

ぜひご活用ください！

4月の自然と親しむ会「ヒノキ林の間伐」にとりくんださい、山主の森下さんからたくさんのモウソウダケをいただきました。そのとき参加された松山五郎さんの奮闘で、タケをつかった緑化資金の募金箱が50個ちかくできあがりました。世話人や黄土高原緑化協力団報告会の参加者のみなさんに会社や集会所、店、組合などに設置していただきましたが、あとすこし残っています。できれば人のたくさん集まるところにおいていただけて、募金に協力していただけるとさいわいです。置いていただける方はGENの事務所までご連絡をお願いいたします。



京阪電車・光善寺駅のすぐ近くに無農薬野菜とアレルギー除去食品を扱う「エルク」という店がある。ガレージを利用した間口2m、奥行き3mほどの小さな店である。

得津富男さんは、8年前からこの店を拠点に無農薬野菜等の宅配を手がけてきた。顧客の半分はアトピーなどの食品アレルギーに悩む家庭で、あの半分が「たべもの」や食品公害に関心の高い人たちだ。枚方市は京阪沿線都市の中では比較的市民意識が高く、週3日の配達で商いは順調だという。

「昔は、家業（印刷屋）もまともにやらないで映画作りや上映運動に明け暮れ、子育ても家庭もかえりみない毎日だった」と、得津さんは以前の暮らしぶりを話す。気がついたら、つれあいが家を出て行き、小学校6年と2年の2人の子供との生活が目の前にあった。それからは、子育てと家業に専念する年月を重ねることとなる。

得津さんは、毎日の料理に気を配るうちに「料理の本がボロボロになるほど何百種類も作り続けた」。そこで、もともと素養もあったに違いないが料理の腕は玄人はだしとなり、同時に「たべもの」をめぐる様々な問題に気付くようになった。スーパーや生協のものは添加物でいっぱいだし、「安全な食品」と称するものの中にも調べていくと、どうもあやしいものがたくさんある。「それなら自分でやるしかない」と、せっぱ詰まった状態で始めたのが今の仕事なのだそうだ。

以来、自分の足で安心できる生産者を捜し、口コミで消費者を組織する息の長い努力を重ねてきた。彼のネットワークの網の目は、いずれも時間をかけて築いた堅い信頼で結ばれた人たちで形成されている。今のつれあいの輝子さんと再婚してからも、3度の食事を作り続ける彼の徹底したライフスタイルは、接する者にある種の哲学すら



得津富男（とくつふみお）さん

46歳。無農薬野菜・アレルギー除去食品の店「エルク」を経営。不登校児の家庭訪問等を行う「地球の子ども・枚方スペース」代表。多芸・多才で、独学で自然食料理を指導する「風のクッキング」を主催するほか、渓流釣り、俳句も趣味を越える腕前。

【連絡先】枚方市北中振3丁目28-7
レジデンス藤 408号 ☎0720-33-8699

感じさせる。それは、長女が登校拒否児となるなど修羅場をくぐり抜ける中で、共同生活者が互いにもっとも無理のない生き方=等身大の暮らしを選びとってきたからだろう。平凡な生き方のようだが、男社会の中ではなかなかやり通すことは難しい。「元気印」は女性の代名詞といわれて久しいが、どこか素敵なお男性もいるのである。

山西省の自然

石原忠一
(92年緑化協力団団長)

⑩古い地質

ヒマラヤ山脈が腰のあたりまで海につかっているような日本列島の山野で自然をみつめてきた私は、太原・五台山・渾源と中国の自然のふところにふれながら、しきりと大陸と島との違いが気になり、1930年グリーンランドの氷床調査のため3度目の越冬観測でかけ50歳の誕生日のあと消息を絶ったA. ウェーゲナーの「大陸移動説」のことを考えていました。

北京まで帰って、初めての中国訪問の仲間たちを八達嶺や明の十三陵見学に送り出して、地質博物館を訪ねました。黄土地帯の地史について説明を求める中、中年の女性学芸員は「私の専門分野でないので……」と断りながら、「8000mのヒマラヤの壁のこちら

側、5000mのチベット高原、一段低く五台山や太行山脈の2000mクラス、そしてこの北京を含む大平野と3段のテラスに分かれます。海から遠い高原は氷河時代の侵食で削られた岩石のクズが中緯度乾燥地帯の照りつける太陽でフライパンのように干しあげられ舞い上がって偏西風に押し流されて黄砂を飛ばしたのです」と。

帰国してから上田誠也さんの『ブレートテクトニクス』、都城秋穂さ

んらの『アジアの地質』をもとに、中国地質科学院編纂の『中国地質図』とその解説を読んで、息を呑む思いをしました。もっとも古い化石の三葉虫のできる古生代は5億年ほど前に始まるのですが、山西省北部は中国でも一番古い桑干造山期のもので「冀魯塊体」といって24億年以上も前のものだというのです。



中国でも最古の24億年前の地質（大同県徐町郷）

河内長野市日中友好協会が GENのバックアップを決定

村蒔義正（食堂経営）

4月25日、河内長野市日中友好協会の第5回通常総会が開かれました。この協会の目的は、文化・芸術・経済・学術などの交流を通じて日中相互の理解を深め、友好の発展に寄与するというものです。ところが、府や大阪市のような大きな所帯ならともかく、河内長野市という一衛星都市の活動としては、具体的な事業は困難で、会議のたびに議題になるのは姉妹都市提携をどうするかということでした。しかし提携を結ぶことは簡単でも、それを継続するとなると、毎年たいへんな経費がかかります。

そこから出てきたのがGENを通じ

ての日中友好交流です。黄土高原に緑を増やすというのは、それだけでも夢のある有意義な活動です。河内長野は林業のさかんな市ですから、植林技術の研修のために中国人の人たちを受け入れることもできますし、植樹のための資金の拠出も可能でしょう。そう考えて、役員会にはかり、総会に提出したところ、承認をうることができました。来賓としてこられた大阪総領事館の領事にもお話しし、協力を約束していただきました。GENにたいしてこれから積極的な支援体制をくむつもりですので、今後もよりよい活動を期待します。

体験！有機農業

磯川佳子（会社員）

5月1日～5日の短い期間でしたが、和歌山県有田郡金屋町にある「蒼生舎」の“生き活き塾”にて有機農業を体験しました（経営概要・平飼養鶏4千羽、肥育牛60頭、養豚♂1♀6、肥育豚40、田畠50a）。

日頃の都会生活から解放されて自然の中で田畠を耕し、鶏のたまごの集卵作業、鶏の解体作業など、なにをするのも初体験、ドキドキ！ワクワク！の毎日でした。特に鶏に囲まれつかれたりして妙に緊張しました。それから、鶏をさわったことのない私が、鶏の解体を体験できたことは貴重な経験だったと思います。夕食にはとり肉でバーベキュー（ほかにもお肉はもちろん）身がしまって新鮮でおいしかった

ですよ！ 労働したあとの食事は最高においしいことを実感しました。

スタッフの方は男性5名女性1名と7歳の女の子と犬2匹、参加者男性2名女性3名、すぐに話もうちとけて、一人一人思いはちがえど、楽しい毎日でした。

今回は、地元の有機農家の方のお話を聞くことができ、農薬の問題、農家の低所得の問題、農作物を作る喜びなどを語ってくださいました。難しいことはわかりませんが、生き活きされている姿がとても印象的でした。

これからも、四季を感じに出かけたいと思います。6月は田植えです。

ゆっくりとこれからの“生きかた”を確かめようと思います。

GEN発足の賛同者 合計172名に達する

4月11日の緑の地球ネットワーク正式発足にあたって、さまざまな方面の

自然と親しむ会

神戸市立森林植物園へ
7月4日(日)朝9時20分

三の宮そごうデパート東側
市バス25番のりば集合
参加費 500円（含保険料）



森林展示館で木や森の見方を学び、園内を歩いて世界の森林を見ます。針葉樹林、夏緑樹林、照葉樹林の中に入ってそのちがいをしらべましょう。

【雨天の場合】開催中のあじさいまつりのあじさいガイドの案内で10数種類のあじさいを見てまわります。こちらも楽しみです。

みなさんのご賛同をいただき、ほんとうにありがとうございました。それ以降もつぎの方々のご賛同をいただきました。

徳山 良枝 中西真佐子 安井
久晃 桂 迪子 匿名 2名
合計で172名（5月17日現在）のご賛同をいただいたことになります。みなさんのご協力にあらためて感謝の意を表します。

印刷ミスのおことわり

会報「緑の地球」の前号（15号）のページが入り乱れて印刷されていた、という連絡を数名の方からいただきました。印刷の段階で、一部にそうしたもののがでたようです。お手元のものに乱丁がありましたら、ちゃんとしたものをお送りしますので、お手数ですがご連絡をお願いいたします。